

1歳児クラスにおける「かみつき」行動の実態と要因の検討 — 或る保育所における1年間の記録の分析を通して —

中 川 智 之

Investigation into the Actual Conditions and Factors of Biting of One-Year Olds — Analysis of One Year of Records in a Nursery School —

Tomoyuki NAKAGAWA

キーワード：「かみつき」行動，保育所，1歳児クラス，実態，要因の検討

概 要

本論は、或る保育所の1歳児クラスにおける「かみつき」行動の記録の分析を通して、保育所保育における「かみつき」行動の実態とその要因を検討するものである。具体的には、12ヶ月にわたる「かみつき」行動の状況を明示するとともに、「かみつき」行動と曜日や月齢との関係、子ども同士の関係等について検討した。その結果、当該保育所の1歳児クラスでは、①1年間を通して「かみつき」行動を全く受けない子どもは1名もいなかった、②1年間を通じて子どもの約85%が「かみつき」行動を示した、③「かみつき」行動は月曜日に最も多く見られ、週末にかけて減少傾向にあった、④「かみつき」行動は月齢22～26ヶ月に最も多かった、⑤「かみつき」行動を頻回に受けるのは活発に遊ぶ子どもであり、逆に受ける回数が少ないのは友達との関わりが少ない子どもであったことなどを明らかにした。また、先行研究や保育所で聴取した内容を交えて、子どもの生活リズムの調整や活動時の子どもの密度を減らす工夫の重要性について指摘した。今後の課題として、子どもの発達と行動との関係に関する丁寧な記録の蓄積と、受動児の特徴にも目を向けた調査研究の必要性が示唆された。

1. 緒 言

本研究の目的は、保育所保育における「かみつき」行動の実態とその要因を解明し、保育所保育の質的向上を図る際の基盤となる資料を提供することである。

近年、保育所の利用を希望する3歳未満児の数は増加を続け、定員の弾力化運用が試されても待機児童の解消には至らない状況である。また、様々な価値観をもつ保護者が増加するとともに、地域の繋がりが以前に比べ希薄となり、保育所において保護者への適切な支援や対応が求められるようになってきた。このような状況の中、保育所保育における子どもの「かみつき」行動は、保育士による保護者対応を困難にさせる一因となるだけでなく、保護者同士のトラブルに発展し、保育所保育を利用できなくなる子どもや保護者の存在

も報告されている¹⁾。

これまでの「かみつき」行動に関する調査・研究としては、藤岡佐紀子・八木義雄(1994)や、西川由紀子・射場美恵子(2004)によるものが著名である^{2,3)}。しかしながら、これらの調査報告の示すものは同一ではなく、原因不明の「かみつき」行動が数多く報告されるなど、現在のところその実態はまだ詳細に明らかにされておらず、保育士が保護者に対して子どもの「かみつき」行動について説明する際に、提示できる資料が少ないのが現状と言えよう。

そこで、本論では、保育所保育における「かみつき」行動の実態について分析し、保護者に子どもの「かみつき」行動について説明する際に利用し得る、実際の記録に基づく数値を交えた客観的な資料を作成することを目的とする。具体的には、保育所から提供を受けた保育記録の分析を通して、1歳児クラスにおける「かみつき」行動の状況、子どもの月齢との関連、「かみつき」行動の生じやすい子ども同士の関係等について検討する。

(平成28年年11月21日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

2. 研究方法

(1) 調査対象

調査対象は、岡山県A市内の私立B保育所1歳児クラスである。当該クラスは年度当初、男児9名、女児7名の計16名（月齢12ヶ月～23ヶ月）であった。年度途中で保育所を退所した子ども（2名：男児2名）や、途中加入をした子ども（4名：男児1名、女児3名）が存在するため、年度末には、男児8名、女児10名の計18名（月齢22ヶ月～35ヶ月）の状態となった。当該クラスに在籍した子どもは、年度途中で退所した子どもと途中加入をした子どもを含め、男児10名、女児10名である。

当該クラスに配置されていた保育士は、年度当初4名であったが（年度当初の保育経験：9年・3.5年・1年・0年）、年度途中の子どもの加入に合わせ1名増員された（増員時の保育経験：6年）。

(2) 調査方法及び分析資料

本論で分析する資料は、保育所保育における「かみつき」行動の実態と要因の解明を目的とした一連の研究を遂行するために、聞き取り調査を実施したB保育所から提供を受けたものである。資料は2種類あり、1つは、保護者への連絡や保育士間の引き継ぎのために、「かみつき」行動を受けた子ども（以下、「受動児」と記載する）に関する情報を複数の担当保育士により記載したクラス記録である。もう1つは、1歳児クラスを担当する保育士個人が、「かみつき」行動をした子ども（以下、「行動児」と記載する）と受動児に関する情報を合わせてメモに残していた個人記録である。

提供を受けた資料の内、最も「かみつき」行動が多く見られた1歳児クラスの記録用紙（2015年4月1日～2016年3月31日）を分析の対象とした^{注1}。また、個人記録はクラス記録と88.4%の一致が認められ、分析の対象として利用し得る資料であると判断した。これら2種類の記録を補完的に用いることにより、当該クラスにおける「かみつき」行動の実態に迫ることができると考えられる。

これまでの先行研究においても、保育士が残した「かみつき」行動の記録を分析するものはあったが、その記録の手間もあってか、その記録収集期間は短く、短いもので2週間、長くて5ヶ月程度のものである^{4,5,6}。また、これまでの研究は、行動児に関するものが大半であり、受動児に対するものは少ない。本論の分析対象となる記録は、年度当初から年度末までの1年間を

網羅する行動児と受動児に関する分析が可能なものであり、その価値は高いと言えよう。

(3) 倫理的配慮

B保育所を直接訪問し、調査の目的、調査への参加の自由や調査途中で中止要請の自由等の調査協力者の権利、及びデータの匿名化や調査協力者が特定されないような発表時の配慮等のプライバシーの保護について説明し、調査協力への同意を得た。提供を受けた記録については、プライバシーの保護に配慮し、データ化する際に匿名化した。また、本論の結果において示す表については、個人が特定されないように、それぞれの表毎に順序を変えて異なる略号を用いて記した（表1・表2についてのみ、比較のため同一とした）。なお、この研究は、2014年度（平成26年度）に川崎医療短期大学倫理委員会⁽²⁾の承認を受けている。

3. 結果

(1) 1歳児クラスにおける受動児の推移

受動児に関する情報が記載されたクラス記録を用いて、受動児毎に「かみつき」行動を受けた回数⁽¹⁾の推移を示したものが、表1である。クラス記録から、当該クラスにおける303回の「かみつき」行動が確認できた。便宜的に、1年間を3ヶ月毎4つの期間に区分すると、年度初め（4～7月）と年度末（1～3月）に比べ、年度の途中（7～9月・10～12月）の方が「かみつき」行動の発生数が多かった。

1年の間に「かみつき」行動を受けなかった子どもは1名もいなかった。また、年間を通じて10回以上「かみつき」行動を受けた子どもは、年度途中で退所や加入した子どもを含めて15名存在した。

(2) 行動児の月齢と「かみつき」行動の関係

行動児と受動児に関する情報が記載された個人記録を用いて、1年間の「かみつき」行動の推移を分析したものが、表2である。個人記録から、当該クラスにおける274回の「かみつき」行動が確認できた。この記録には、クラス記録には含まれない、他クラスの子どもへの「かみつき」行動5回と、保育士への「かみつき」行動1回が含まれていた。表1と比較すると、クラス記録に残されている記録の88.4%と一致しており、個人記録を用いた分析結果は、クラスにおける「かみつき」行動の傾向を概ね反映していた。

行動児の月齢と「かみつき」行動との関連を検討するために、個人記録の中から、受動児は判明するが行動児が不明な10件を除き、行動児の各月齢において見

表1 1歳児クラスにおける受動児の推移（クラス記録）

	「かみつき」行動を受けた子ども（受動児）																			計	
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ		ト
4月	5			1		2			1	1											10
5月	6	7	2	1		2	3		3		1	1	2				1				29
6月	1	2	3	2	3	3			1		1										16
7月	9	8	1	3	2	6		2	1		2	3	1	2		3	2				45
8月	2	3	1	1	3	1	1	1	2	2	3	2		2		1					25
9月	3	3	3	4	2	5	1	1	2	4		1									29
10月	5	5	5	3	2		6	3	3		5	2		2		2					43
11月	4	3	4	3	2		1	4		3		3	4		1						32
12月	4	3	1	2	2			2		2			2	2		1	1			2	24
1月	2			1	3								1					4	2		13
2月	4	2	2	1	1		2						2	1							15
3月	3	1	1	1	2			1		1			1		9	1			1		22
計	48	37	23	23	22	19	14	14	13	13	12	12	11	10	10	9	4	4	3	2	303

注) 斜線は、退所あるいは途中加入等により、クラスに所属していなかった月を示す。

表2 1歳児クラスにおける「かみつき」行動の推移（個人記録）

	「かみつき」行動を受けた子ども（受動児）																				計		
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト		他クラス	保育士
4月	5					2			1	1												9	
5月	5	6	2			2	3		3		1	1	2				1				1	27	
6月	1	2	3	2	3	3			1													15	
7月	9	8		3	2	6		2	1		2	1	1	2		3	2					42	
8月	1	3	1	1	2		1		2	1	2	1		1		1					2	1	20
9月	3	2	3	4	1	4	1	1	2	2		1											24
10月	5	4	5	3	2		6	3	3		5	2		1		2							41
11月	3	3	4	3	2		1	4		2		3	4		1								30
12月	4	3	1	2	2			2		2			2	2		1	1			1			23
1月	2			1	2								1					3	2				11
2月	4	2	2				2							1	1						1		13
3月	2	1	1	1	1			1					1		8	1			1		1		19
計	44	34	22	20	17	17	14	13	13	8	10	9	11	7	9	9	4	3	3	1	5	1	274

注) 斜線は、退所あるいは途中加入等により、クラスに所属していなかった月を示す。

られた「かみつき」行動の回数を表にまとめたものが、表3である。具体的には、「かみつき」行動が見られた日が、生後何日目に当たるかを確認し、月齢を計算した。ここでは、生後の日数を30.42で除し、小数点以下を切り捨てて月齢とした^{注2}。それぞれの月齢において4回（一週間に1回程度）以上見られた月には破線で、8回（一週間に2回程度）以上見られた月には実線で印を付けた。さらに12回（一週間に3回程度）以上見られた月にはゴシック体で示した。なお、表3は12ヶ月を通して1歳児クラスに所属し、「かみつき」行動が

1回以上見られた子どもについて記載している。12ヶ月間在籍し、「かみつき」行動が見られなかった子どもは2名であった。

表3から、「かみつき」行動の多くは、2歳の誕生日を迎える月齢23・24ヶ月とその前後に生じていた。それぞれの子どもについて最も多く「かみつき」行動が見られた月齢は、16ヶ月（1名）、17ヶ月（1名）、20ヶ月（2名）、22ヶ月（3名）、23ヶ月（2名）、24ヶ月（3名）、26ヶ月（1名）、27ヶ月（1名）であった。なお、最高値を示した月齢が2箇所ある場合は、両方

表3 行動児の月齢と「かみつき」行動の関係

		月齢																			
		14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
行動児	①		1	15	5	1			1				2								
	②			1	4		1		2	4	1	2									
	③			1			1	6	5	6	12	6	3	3	4						
	④					1			1	5	8	1	1	1	1						
	⑤						2	5	3	25	16	4	17	14	8	3	6	4			
	⑥							3					1								
	⑦							2			1	1									
	⑧									2				2							
	⑨									1	2	10	3			2		1	2	4	
	⑩											1									
	⑪											1									
	⑫														1						
計		0	1	17	9	2	4	16	12	43	40	26	25	22	14	5	6	5	2	4	0

表4 「かみつき」行動と曜日の関係

曜日	月	火	水	木	金	土
開所日数	45日	48日	48日	51日	51日	51日
「かみつき」行動の生じた日数 (%)	32日 (71.1%)	35日 (72.9%)	24日 (50.0%)	35日 (68.6%)	29日 (56.9%)	3日 (5.9%)
「かみつき」行動の回数 (一日平均回数)	70回 (1.56回)	64回 (1.33回)	52回 (1.08回)	68回 (1.33回)	51回 (1.00回)	4回 (0.08回)

注) 月曜日～金曜日は、特定の曜日に決まって休むような子どもはおらず園児数の偏りはないが、土曜日は、保育所を利用しない子どもがおり少人数での保育となる。

とも計上した。

(3) 「かみつき」行動と曜日の関係

クラス記録に残された303回の「かみつき」行動の情報に、個人記録に残された他クラスの子ども及び保育士に対する「かみつき」行動6回の情報を加えて、曜日と「かみつき」行動の関係を表にまとめたものが、表4である。当該1歳児クラスにおいては、月曜日から金曜日まで、平均すると1日あたり1回以上の「かみつき」行動が見られていた。これに対し保育所を利用しない子どもがおり、少人数での保育となる土曜日には、「かみつき」行動がほとんど見られておらず、1年間で4回見られたのみであった。

「かみつき」行動が最も見られたのは月曜日であり、月曜日に開所していた45日の内71.1%の32日において、その行動は確認された。1日あたりの平均回数は1.56回であり、週末である金曜日と比較して、約1.5倍

多く「かみつき」行動が発生していた。月曜日に次いで「かみつき」行動が多いのは、火曜日と木曜日であり、逆に、「かみつき」行動が少ないのは、水曜日と金曜日であった。なお、当該保育所に確認したところ、1歳児クラスの子どもには、保護者の都合や本人の体調不良・通院等により特定の曜日に休みの多くなるような子どもは存在しなかった。

(4) 「かみつき」行動と子ども同士の関係

1歳児クラスで見られた「かみつき」行動における行動児と受動児の関係について整理したものが、表5である。実際には、偶然手が口の位置にいてしまい「かみつき」行動が生じてしまったような事例もあったことから、同一の子どもに対して「かみつき」行動が3回以上見られた、偶然とは考えにくいものについて破線で印を付けた。その2倍にあたる、同一の子どもに対する「かみつき」行動が6回以上見られた箇所

表5 1歳児クラスにおける「かみつき」行動の関係

		受動児																		計		
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R		S	T
行動児	A																					0
	B			1				1														2
	C	2	2		12	3	2								2	1	1					25
	D					1																1
	E		4	20	19		6	9	5	7	5	7	3	3	6	5	3	1	1			105
	F			1					1							1	1					4
	G					1			1					1		1						4
	H		3	2	2	2	3					1	1	2	1							17
	I																					0
	J			3	2	1		1		1		1		2	1	2	1					15
	K	1		3	6	5	7	8		1	3		3	3	1	2		1		1	2	47
	L					1																1
	M	1	1	1	1	2	3		4		1	4			1	4					1	24
	N			1					2									1				4
	O							1														1
	P																					0
	Q						1															1
	R																					0
	S																					5
	T																			2		2
計	4	10	32	42	16	22	20	13	9	9	13	7	11	12	16	6	3	1	3	9	258	

には、実線で印を付けた。さらに10回以上の箇所についてはゴシック体で示した。

1年間を通して、10回以上「かみつき」行動が見られた行動児は6名存在した。この6名は、年間を通じてクラスに所属していた子どもであった。これは、年間を通じてクラスに在籍していた14名の内、約45%にあたる。特に行動が顕著に見られたのはE児であり、その回数は、記録に残っているものの内、約40%を占めた。

「かみつき」行動が全く見られなかったのは3名であり、この内1名は12月中旬以降クラスに加入した子どもであった。年間を通じてクラスに所属していた14名の内、12名(約85%)に「かみつき」行動が見られたことになる。この割合は、年度途中で退所や加入した子どもを含めても、ほぼ同一であり、1歳児クラスの大多数に、「かみつき」行動が生じていたことが明らかとなった。

実線及び破線の印が顕著な行動児は、C児・E児・

K児・M児である。C児の「かみつき」行動の主な対象となった受動児はD児であった。D児は、E児・K児の「かみつき」行動の対象ともなっていた。これに対し、D児が示した「かみつき」行動は1回だけで、E児に対するものであった。

E児の「かみつき」行動を多く受けたのは、C児・D児・G児である。D児については前述した通りであるが、C児は、J児・K児の「かみつき」行動の対象となったこともあり、G児は、K児の「かみつき」行動も多く受けていた。この他に、F児は、E児・H児・K児・M児の「かみつき」行動の対象となっていた。

4. 考 察

「かみつき」行動の発生状況は、概ね、週の始まりに多く見られ、週末にかけて減少する傾向があると言えよう。曜日毎に「かみつき」行動に差が生じた結果について、当該保育所の所長及び保育士は実感と重なる部分が多いとのことだった。週末、保育所とは異なる

る生活リズムの家庭で過ごすためか、週明けの子どもの様子は直前の週末の様子とは異なり、徐々に保育所での生活リズムになれてくるに従って、子どもは落ち着いてくるという感覚を保育士らはもっていた。

土曜日・日曜日を過ごす家庭での生活と、保育所の生活との相違は、家庭と保育所での生活リズムのズレ、子ども同士の間のリズムのズレ、子どもと保育士の間のリズムのズレ等、複数のズレを生じさせる。週明けには子どもの「かみつき」行動が多く見られているという事実を認識し、まずは保育士が率先して子どもの生活リズムを整えることに留意する必要があると言えよう。

また保育士らは、週の半ばを過ぎた頃に、子どもの様子を見て気を引き締めて保育しなければならないと感じることが度々あるようで、木曜日に若干数値が上がることにしても、違和感はないとのことであった。しかしながら、その理由や要因については明確には指摘することができないとのことであった。週末に近づくにつれ、子どもの疲れが溜まってくることも考えられるが、もしそれだけが要因であるのであれば、金曜日に発生頻度が減少する理由が説明できない。この減少は、当該クラスにおいて特別に見られる現象であり、一般には見られないものである可能性もある。今後、他のクラスにおいても同様の現象が見られるのか調査するとともに、木曜日をもつ特徴的な意味合いについても検討することが肝要であろう。

他方、「かみつき」行動と月齢との関係においては、22～26ヶ月に「かみつき」行動が多く見られた。先行研究においても同様の結果は示されていたが、それらは調査期間の関係から、異なる子どもに関する調査結果を組み合わせで導き出されたものであった^{7,8)}。本論における1年間を通じた記録の分析は、同一の子どもの月齢による「かみつき」行動の変化を明示するものであり、先行研究の成果を裏付けることができるものと言えよう。

「かみつき」行動だけでなくトラブルの発生件数を調査した研究においては、月齢が12ヶ月～26ヶ月において高い発生件数を示しているものがあり、本論での結果より幅がある⁹⁾。若干早い時期からトラブルが発生していると言え、この理由が、本論においては「かみつき」行動のみに焦点を絞っていることに起因するのであれば、トラブルが発生しやすくなる時期を迎えて数ヶ月経過した後に、「かみつき」行動が生じやすい時期を迎える可能性がある。また、トラブル場面に

おける子どもの方略に関する調査では、1歳児クラスでは「かみつき」や「ひっかく」といった身体的行動が最も多く生起し、2歳児クラスになると身体的行動と言語的行動が同程度生起していることが報告されている¹⁰⁾。このような子どもの発達と行動との関係に関する丁寧な記録の蓄積は、「かみつき」行動の要因に関する理解を深め、「かみつき」行動が多発する発達の状態から、次の発達の状態への移行を促進する保育の方法を検討する上で重要なものとなると言えよう。

本論では、「かみつき」行動を示す回数だけでなく、その行動を受ける受動児となる回数にも、子どもによって大きなばらつきが存在することを示した。また、行動児と受動児の組み合わせも種々に存在した。このような子ども同士の関係の観点から「かみつき」行動を検討し、「かみつき」行動が生じやすい関係性を明らかにすることができれば、生活や遊びのグループを作る際に、保育士が子どもの人的環境を調整する上で有益な情報となろう。行動児の特徴に注目するだけでなく、受動児の特徴にも目を向けた研究の蓄積が必要と考えられる。

本研究で対象としたクラスにおいて受動児となることが多かった子どもは、C児・D児・F児・G児である。この子どもたちは、元気で、よく保育士の周囲に集まり一緒に活発に遊ぶことが多かったそうである。逆に、12ヶ月クラスに在籍していたにも関わらず、「かみつき」行動を受けることが少なかったA児は、大人しい性格で、友達との関わりは少ない子どもであった。また、受動児となることが多かった子どもの内、D児・F児・G児は、「かみつき」行動を示すことが少なかった。しかしながら、前述した通りD児・F児・G児は活発に遊ぶ子どもであり、トラブルが生じることも多かった。その際、D児・F児・G児は「かみつき」行動ではなく、相手をたたくななどの身体的行動を取っていたそうである。

これらのことから、子どもとの関わりが多くなるほど、「かみつき」行動を含めたトラブル時の身体的行動は増加すると言えよう。森本信也ら(2012)は、幾つかの保育所でのトラブルの発生率や保育環境の比較を通して、保育室の面積や子ども1人あたりの面積が直接的にトラブルの発生率に影響を与えるわけではないことを示している¹¹⁾。加えて、発生率の少なかった保育所のビデオ記録の分析を通して、生活のリズム・流れやトラブルが発生しそうな際の保育士の事前の関わりが、トラブルの発生率の減少に影響を与えるのではな

いかと考察している。森本らの調査は、異なる保育所における子どもの行動を比較したものであるのに対し、本論での分析は、物的環境・人的環境等に差のない同一クラスで生活する子どもに関する記録を比較したものである。両者の結果から、単純な1人あたりの面積ではなく、活動する際のその時々密度が、「かみつき」行動に影響を与える要因となっている可能性が指摘できる。

子ども同士の関わりを担保しつつ、過度な子ども同士の接触を制御し得る保育環境や、生活の流れの工夫が重要となろう。22～26ヶ月頃に「かみつき」行動が多く見られることを踏まえると、月齢を考慮して小グループに分けた保育が「かみつき」行動を減少させる可能性もある。今後、1歳児クラスを小グループに分けた保育の方法を取り入れている保育所と、そうでない保育所とを、「かみつき」行動の観点から比較することが有益であろう。より多数の保育所におけるデータの蓄積による更なる検討が、今後の課題と言えよう。

5. 注

- 1 先行研究においても1歳児クラスに在籍する子どもは、「かみつき」行動が多いとされる月齢に当たる^{12,13)}。また、当該クラスは、例年に比べても特に「かみつき」行動が多く見られたクラスだったそうである。
- 2 月齢を計算するために用いた30.42日は、365日を12ヶ月で割ったものである($365 \div 12 \div 30.42$)。また、誕生日を生後1日目と計算し、1歳の誕生日が366日目となるようにした。具体的には、1歳の誕生日の前日である365日目は、 $365 \div 30.42 \div 11.999$ となり、小数点以下を切り捨てて月齢11ヶ月、誕生日を迎えた366日目は、 $366 \div 30.42 \div 12.032$ となり、月齢12ヶ月とした。これは、出生の日より起算し、誕生

日の前日午後12時に年齢を1つ加えるという「年齢計算ニ関スル法律」にも適合するものである。以上のことから本論では、その誕生月に関わらず便宜的に1ヶ月を30.42日と考え、生後の日数を30.42日で除して小数点以下を切り捨てたものを月齢とした。

6. 謝 辞

本研究はJSPS 科研費 26750358の助成を受けたものです。

本研究の遂行に際し、ご協力及びご助言を戴きました保育所所長並びに保育士の先生方に心より感謝申し上げます。

7. 文 献

- 1) 西川由紀子・射場美恵子：「かみつき」をなくすために保育をどう見直すか、かもがわ出版、2004。
- 2) 藤岡佐紀子・八木義雄：保育所児におけるかみつきの研究、『日本保健福祉学会誌』、第1巻第1号、57—66、1994。
- 3) 前掲著1)。
- 4) 前掲論文2)。
- 5) 中村尋子・北野哲也・藤岡佐規子・八木義雄・山下藹子：保育所児におけるかみつきの研究、『日本保育学会大会研究論文集』、第51号、506—507、1998。
- 6) 森本信也・田中哲郎・大西宏幸・志賀口大輔・辻 健二・落合陽子・三角岳生・浅香聡彦・堀 昌浩・吉岡伸太郎・竹内勝哉・永瀬時久・高山静子・細田直哉・相沢康夫：乳児保育におけるトラブルの要因とその解決に関する研究、『保育科学研究』、第3巻、50—74、2012。
- 7) 前掲論文5)。
- 8) 前掲論文6)。
- 9) 前掲論文6)。
- 10) 倉盛美穂子：乳児期における適応方略としての自己主張行動に関する研究、『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』、319、2013。
- 11) 前掲論文6)。
- 12) 前掲論文5)。
- 13) 前掲論文6)。

